空飛ぶクルマ

巻頭言

金属労協（JCM）事務局長
梅　田　利　也

ニュースで高速道路料金の無料化が最大2115年まで延期になったと聞きました。

全国の高速道路は通行料金にてその建設費用等を賄うことになっているようですが、その有料期間が2065年までと定められていたようです。

思い出してみれば、旧民主党が2009年の衆議院議員選挙マニフェストに「高速道路無料化」を掲げ、その後政権を担っていた時期に、社会実験として一部の高速道路無料化が行われたことがありましたね。

その後どうなったのかについてはあまり気にしていませんでしたが、期限が定められていたということからすれば、将来は無料化するという方向だったのでしょう。

もっとも2115年（92年後、ドラえもんが誕生する2112年から3年後）ということは、現在の国民の多くには関係のないことかと思いますが。

ところでその頃の日本はどのような世界になっているのでしょうか。

2065年の日本の姿について、多くのシンクタンクや業界団体にて未来予想図が描かれていますが、共通しているキーワードは、「人口減少」「超少子化」「超高齢化」「国力低下」「GDP世界７位へ（現在３位）」「社会資本老朽化」「労働力不足」などなど、残念ながら明るい言葉が見当たりません。

やるべきことはハッキリしているはずなのですが、いまの世の中の動きをみてみると、危機感が不足しているように思えますし、スピード感も感じられません。このままではマズイと不安になるのは私だけではないと思います。

物事を動かすのはいつの時代も熱い想いを持った「人（人たち）」であり、過去の歴史を見てみても、明治維新や戦後の復興など、私たちは危機を再生の好機としてきました。

いまを生きる当事者である私たちは、次世代を担う人たちに「あなた方のせいで、こんな世の中になってしまった」と言わせることがないように、ひとり一人が置かれた立場において勇気をもって行動することで、いまの危機的状況から抜け出すことができるものと信じています。

ある米国シンクタンクによれば、2040年には空飛ぶクルマの市場が1兆5,000億ドル（約157兆5,000億円）になるとの予測がされており、欧米を中心に環境整備が進められる中、世界中の名立たる航空機メーカーや新興企業が開発にしのぎを削っており、実用化に向けた動きが顕著になっています。

政府は2018年から「空の移動革命に向けた官民協議会」を立ち上げ、2030年の本格普及に向けたロードマップを制定するなど、官民一体となって研究開発や実用化を見据えた法整備を進めていますが、残念ながらこの方面においても海外と比べるとその動きが鈍いと言わざるを得ません。

このような中、2025年4月に開催される大阪・関西万博における空飛ぶクルマの運行開始を目指し、現在、各メーカーにおける実証実験が進められるとともに、本年２月には日本の空を飛ぶ４機種※が発表されるなど、私たちが乗車体験できる日もすぐそこまで近づいています。

空飛ぶクルマは夢ではなく現実のものとなりつつあり、遠くない将来、誰でもいつでも空を飛べる時代がやってくることが期待されるところです。

空飛ぶクルマが飛び交う時代に、誰も使わなくなるかもしれない高速道路。

高速道路の有料化・無料化議論にあたり、空飛ぶクルマのことが考慮されているのかどうか気になるのは私だけでしょうか？

※空飛ぶクルマ４機種

機種名	定員	メーカー	運行事業者
Joby S-4	5人	Joby Aviation（米）	ANA ホールディングス Joby Aviation
Volocity	2人	Volocopter（独）	日本航空
VX4	5人	Vertical Aerospace（英）	丸紅
SD-05	2人	SkyDrive（日）	スカイドライブ